

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370331

研究課題名(和文) 21世紀のホロコースト表象 ユダヤ系アメリカ文学の新しい潮流

研究課題名(英文) The Holocaust Representation in the 21th Century: New Currents of Jewish American Literature

研究代表者

坂野 明子 (Sakano, Akiko)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20153900

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はホロコーストの記憶が第二次大戦後に生まれたユダヤ系アメリカ作家たちによってどのように継承され、表象されているかに注目したものである。2018年3月には集大成として『ホロコースト表象の新しい潮流 ユダヤ系アメリカ文学と映画をめぐって』を出版した。本書ではアメリカにおけるホロコースト受容の歴史やイスラエルにおけるホロコーストの政治利用が、文学や映画によるホロコースト表象にさまざまな形で影響を与えていることを検証した。

研究成果の概要(英文)：We have been interested in how the Jewish American writers born after the end of the World War respond to the Holocaust of which they don't have any direct knowledge, and how they try to retain "the memory of the Holocaust" in their works. We published the book titled New Currents of the Holocaust Representations: Jewish American Literature and Movies in March 2018. We clarified that their representations are somewhat affected by the history of the reception of the Holocaust in the United States and the political use of the tragedy in Israel.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 ユダヤ系作家 ホロコースト 映像論

1. 研究開始当初の背景

20世紀末頃から、ユダヤ系アメリカ文学におけるホロコースト表現には明らかに変化が見られるようになった。ソール・ペロー、バーナード・マラマッド、I・B・シンガーなどのホロコーストと同時代を生きた作家の場合は、1950年代ではホロコーストを背景に据え、1960年代以降、ホロコーストに関わる主題をかなり直接的に扱うようになるものの、自ら体験したわけではない惨劇をいかに語るかという命題に対峙することになったとき、ホロコーストを生み出す文明の野蛮性を形而上的に問う傾向を強めていった。

一方、30年代生まれのフィリップ・ロスを始め、最も若いところでは70年代後半生まれのジョナサン・サフラン・フォアなどの後継世代の作家たちの場合は、ホロコーストとの時間的距離が拡大したにもかかわらず、自らのユダヤ性を確認し、検証するために積極的にホロコーストと向き合っていく。つまり歴史的事実のひとつとしてそれを捉えるのではなく、より広くユダヤの宗教/文化の文脈の中にホロコーストを置き、そのことによって現代アメリカ社会に生きる自身と東欧ユダヤ世界の関係性を探ろうとしたのである。ただ、この点についての詳細な研究はまだ十分になされているわけではなく、今後の研究が待たれる段階であった。

2. 研究の目的

20世紀末以降のユダヤ系アメリカ文学において、ホロコースト表象がユダヤの民族文化遺産を活かしつつ継承されている新しい傾向に注目し、表象の具体像の提示を試みる。また、一見過去に向いていると思われるものが、実はアメリカ文学という文脈の中で新たな可能性を示し、さらには広く、人類の負の遺産に対する文学表現の現代的有用性を示唆していることを検証する。

3. 研究の方法

読書会形式の定例研究会を活動の柱とする。

研究対象の中心を1980年代以降に活躍し始めたユダヤ系作家たちとし、併せて、先行世代の作家たちも対象とする。そしてこれらの作家たちのホロコースト表象に焦点をあて、詳細なテキスト分析を行うと同時に、アメリ

カ文学の枠組みの中での彼らの特性も探る。

また、ホロコースト表象研究が非常に盛んな

米国での最新の研究動向を把握するため情報

の収集に努め、4名で共有し、研究をグロー

バルなものにするよう努める。以上の作業を

踏まえて、4名の間で一定の理解を確立し、

公開シンポジウムでの意見交換などを経て、

研究書にまとめ上げる。

4. 研究成果

研究を進めていく中で、新しいホロコースト表象として文学作品だけでなく、コミックスや映画も重要な媒体であることが判り、研究会での検討の対象の一部に組み込んでいった。また、ユダヤ人ではなく、ドイツ市民の視点からナチス体制下の状況を描いた作品もあることを知り、多様なアプローチが必要であることを理解した。

一方、アメリカにおけるホロコーストの受容の歴史も作家たちの意識に大きく影響を与えていることが判明した。そもそも自国から遠く離れたヨーロッパの地で起きた悲劇について第二次世界大戦後の国際状況も影響して、アメリカ人の多くは強い関心を抱いてはいなかった。しかし、まず『アンネの日記』の書籍、舞台、映画がホロコーストの知識を大衆的レベルで広めた。ついで、人々はエルサレムで行われたアイヒマン裁判を通して、ナチスの非人道的行為、システムティックな虐殺の全容を知ることになった。さらに、1980年代のテレビドラマ『戦争と家族』がアメリカにおけるホロコースト受容に決定的な変化をもたらし、ホロコースト研究が隆盛を極め、ついには首都ワシントンにホロコースト・ミュージアムができるにいたった。ただし、それらの流れの中でホロコーストが「アメリカ化」していったことは否めない。そういう意味で、若いユダヤ系作家たちはホロコーストに対して複雑な意識を持つようになり、彼らが自身のアイデンティティを考えるうえで、ホロコーストが重要な要素となっていくのである。

他方、彼らにとってイスラエルにおけるパレスチナ問題も無視できない問題であった。かつてはユダヤ系アメリカ人にとってイスラエルは全面的に支援すべき存在であったが、パレスチナ人に対して、第二次大戦中にナチ

スがしたのと同じことをイスラエルがしているのではないかと考えることで、彼らのユダヤ人意識は揺さぶりをかけられたわけで、例えばネイサン・イングラダーによる『アンネ・フランクについて語る』のようにその微妙な心の揺れを反映する作品も登場したのであった。

そして、これら若い作家たち、あるいは一世代前のフィリップ・ロスの場合も、ホロコースト受容を巡る複雑な状況を直視した結果であろう、突き放したようなユーモア、屈折した語り、SF的要素など、さまざまな手法を用いてホロコーストを表象しているのである。

1年の延長を受け、4年間継続した研究会および個人による研究、論文執筆などを経て、ユダヤ系アメリカ作家によるホロコースト表象の上記のような状況を解明することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

佐川和茂、「ユダヤ研究における核とすそ野」、『青山経営論集』、査読無、52-3、2017、107-120

坂野明子、「フィリップ・ロス『父の遺産』に見る「聖」と「俗」の逆転劇」、『シユレミール』、査読有、16、2017、55-56

佐川和茂、「ユダヤ民話の世界 信仰と迷信の狭間」、『シユレミール』、査読有、15、2016、23-32

佐川和茂、「ジェラルド・グリーン」の『最後の行かれる男 人生の修復と結婚の修復』、『シユレミール』、査読有、14、25-34

[学会発表](計21件)

伊達雅彦、「アメリカ映画のユダヤ人 その存在は偶然か、必然か」、『日本ユダヤ系作家研究会』、2018

伊達雅彦、「「聖」なる壁を越えて アメリカ映画に見るハシド派社会」、『日本アメリカ文学会中・四国支部例会』、2017

坂野明子、「Philip Roth 論への試み その一步として」、『日本ユダヤ系作家協会』、2016

大場昌子、「Maricie Hershman, Tales of the Master Race におけるホロコースト表象」、『日本ソールペロー協会東京支部』、2016

坂野明子、佐川和茂、大場昌子、伊達雅彦、「文学と映画に見る記憶の継承」、『専修

大学人文科学研究所公開講座、2015

坂野明子、「The Yiddish Policeman's Union について」、『日本ソール・ペロー協会東京支部』、2015

大場昌子、「Nicole Krauss のユダヤ性 The History of Love を読む」、『日本ソールペロー協会東京支部』、2015

伊達雅彦、「『エプリシング・イズ・イルミネイティッド』に見るホロコースト表象」、『日本ソール・ペロー協会東京支部』、2014

[図書](計10件)

坂野明子、佐川和茂、大場昌子、伊達雅彦、彩流社、『ホロコースト表象の新しい潮流』、2018、296

佐川和茂、大場昌子、伊達雅彦、橋本賢二、相原優子、ジャック・ライオン、三杉圭子、岩橋浩幸、町田哲司、片淵悦久、杉澤伶維子、鈴木元子、池田肇子、彩流社、『彷徨える魂たちの行方』、2017、355

坂野明子、佐川和茂、伊達雅彦、広瀬佳司、江原雅江、今井真樹子、鈴木久博、アンドリュー・M・ゴードン、杉澤伶維子、風早由佳、中村善雄、彩流社、『ユダヤ系文学に見る聖と俗』、2017、272

坂野明子、佐川和茂、伊達雅彦、広瀬佳司、今井真樹子、鈴木久博、秋田万里子、大森夕夏、杉澤伶維子、アンドリュー・M・ゴードン、風早由佳、中村善雄、彩流社、『ホロコーストとユーモア精神』、2016、286

坂野明子、佐川和茂、伊達雅彦、広瀬佳司、今井真樹子、中村善雄、勝井伸子、アンドリュー・M・ゴードン、鈴木元子、鈴木久博、大森夕夏、杉澤伶維子、彩流社、『ユダヤ系文学と「結婚」』、2015、264

坂野明子、佐川和茂、伊達雅彦、広瀬佳司、江原雅江、勝井伸子、鈴木元子、中村善雄、タラス・サック、アンドリュー・M・ゴードン、杉澤伶維子、鈴木久博、木庭沙耶佳、大阪教育図書、『ユダヤ系文学に見る教育の光と影』、2014、300

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

坂野 明子 (SAKANO Akiko)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20153900

(2)研究分担者

伊達 雅彦 (DATE Masahiko)

尚美学園大学・総合政策学部・教授

研究者番号：00254889

佐川 和茂 (SAGAWA Kazushige)

青山学院大学・名誉教授

研究者番号：20137871

大場 昌子 (Oba Masako)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：80160612

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()